杜の都に浮かぶ「月」

仙台は青葉山から海まで続く河岸段丘のうえに拓かれた町であり、水源から海まで自然流下で水を配れることから、人類史上稀に見る激甚災害に見舞われたあとでも水を流し続けることができた奇跡の町でもあります。そんな仙台の皆さんが、復興の証としてここで実現すべき公共性は歴史と祈りの交点に立つ、「杜」に浮かぶ「月」なのではないかと考えます。

仲の瀬橋上からの外観イメージ

建築空間の魅力と総合デザイン

全ての機能をつなぐ「慰霊空間」に現れる「メタ劇場」

・大ホール・小ホール・災害文化発信拠点をT字型に配置し、中心にすり鉢状の段を形成した「慰霊空間」を配することで、数千人の市民が心をひとつにして歴史や祈りに捧げることのできるホールを創出します
・慰霊空間に面する壁は開閉可能な緞帳や可動間仕切りとすることで仙台市の特徴的な地形である緩やかな河岸段丘や仙台市街地、海を眺められる「祈りの軸」を構成します
・ホールを使用していない際は慰霊空間から市民のアクティビティを眺めることができ、共創や練習といった、もう一つの演目が演じられる「メタ劇場」が現れます

青葉山エリアの中での景観的位置づけ、果たすべき役割

「祈り」と「歴史」が交差する場所

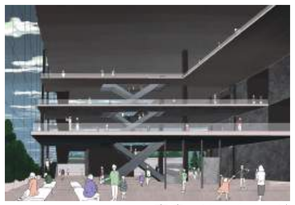
・エントランスからは青葉城跡の伊達政宗像を望むことができ、青葉城・国際センター展示棟・国際センター駅・広瀬川の「歴史の軸」を構成します
・災害文化創造拠点はの向こうに青葉城が見え、小ホールはステージの向こうに青葉城を眺めることができます「祈りの軸」と「歴史の軸」が直交することで、青葉山を背負い、海へ向かって祈ることができる公共空間をつくります

「歴史の軸」広域断面イメージ

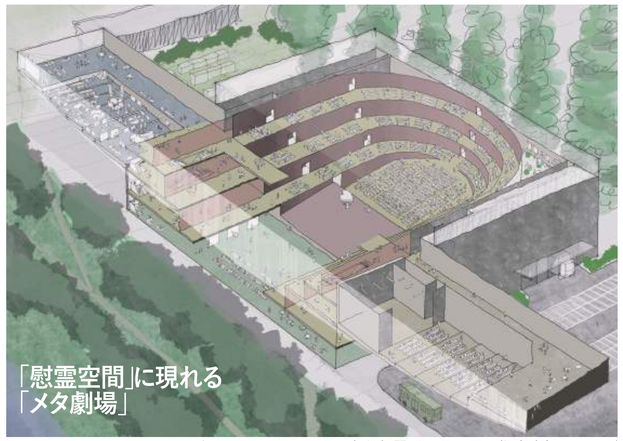
立ち寄りやすく多様な時間を過ごす人々が共存する空間づくり

40mのキャンチレバーで迎える

・大ホールはRC造、キャンチレバーの元端部はSRC造として水平力を確保し、両翼をS造として軽量化することで南北に長さ160m・幅30mの広大な通り抜け空間を創出します　・この通り抜け空間は駅と駐車場を繋ぎ、電車でやってきても、自家用車などでやってきても、広瀬川沿いを歩いてきても、等価に迎えることができます　・構造は室の区画と一致させた一体的な構造とし、地下階で柱頭免震とすることで水平力を吸収します



交流ロビーイメージ



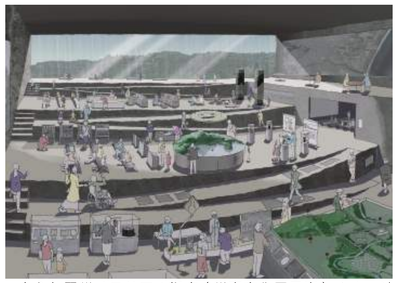
大ホール・小ホール・中心部震災メモリアル拠点内観イメージ

施設計画・動線の合理的解決と実現性

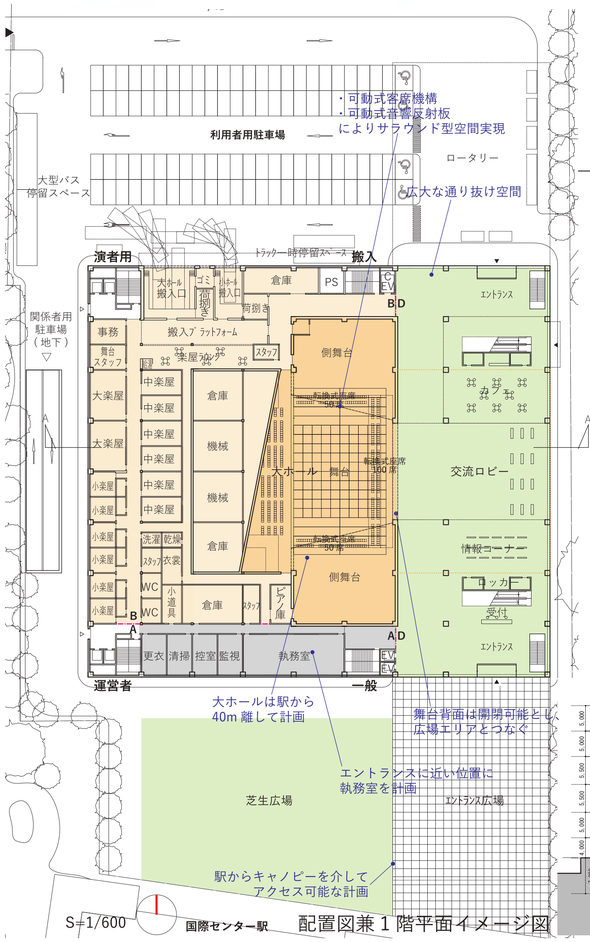
視線は一体的に繋がり、動線は個別に区分されている空間

・施設全体として視覚的には一体化されつつも、動線上は以下の4つ区画に明快に区分されることにより、合理的な管理運営を可能にします

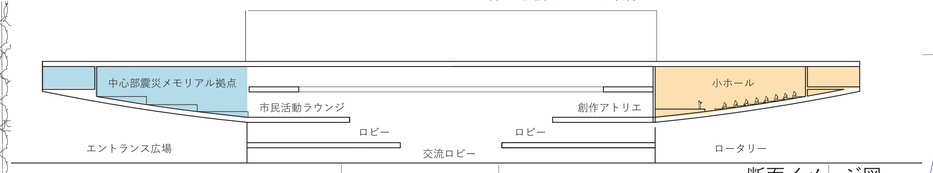
区画A:管理者のみ立ち入る区画
区画B:演者(＋管理者)のみ立ち入る区画
区画C:チケット保持者(＋管理者)のみ立ち入る区画
区画D:一般利用者が立ち入る区画



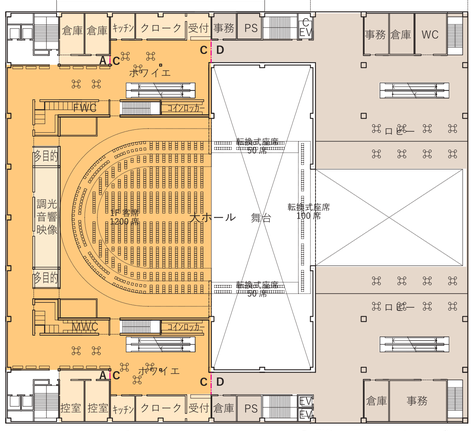
中心部震災メモリアル拠点（災害文化展示室）イメージ



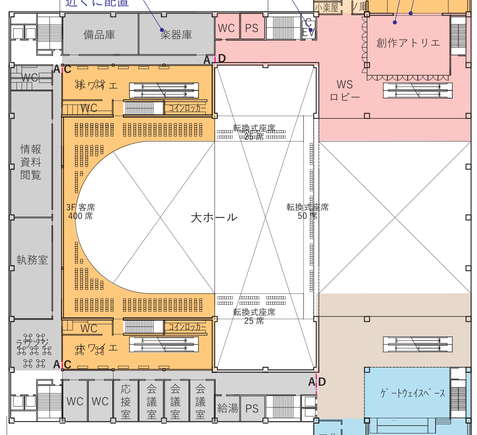
配置図兼１階平面イメージ図



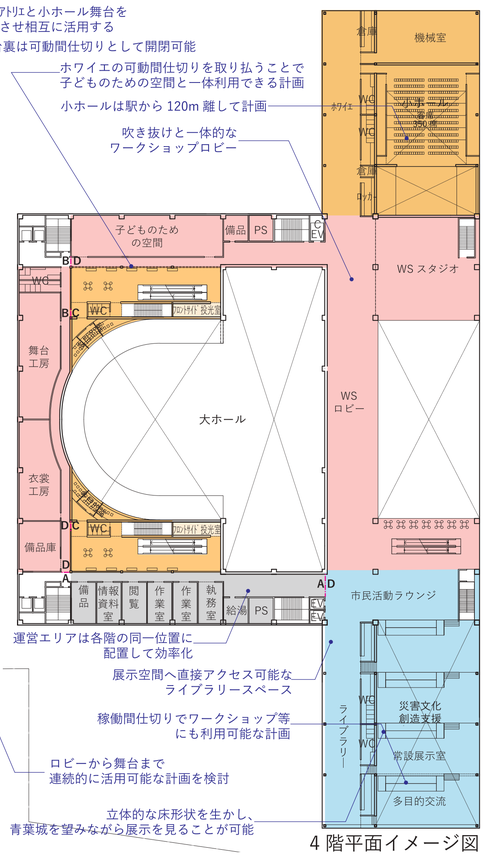
断面イメージ図



2 階平面イメージ図



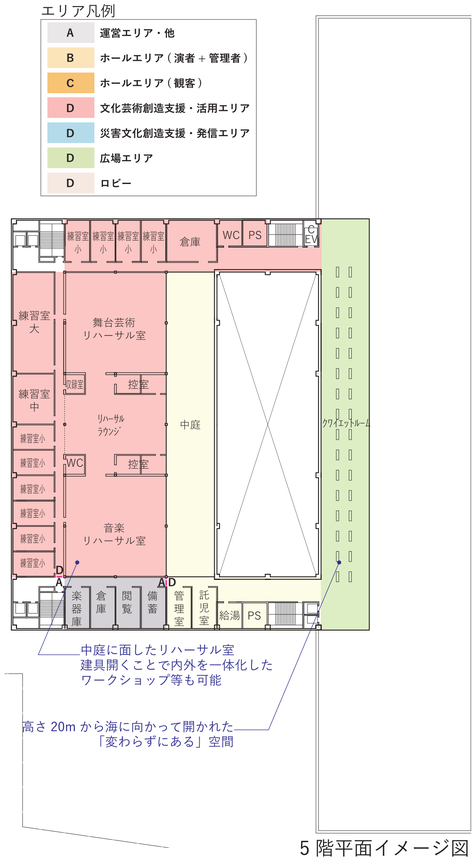
3 階平面イメージ図



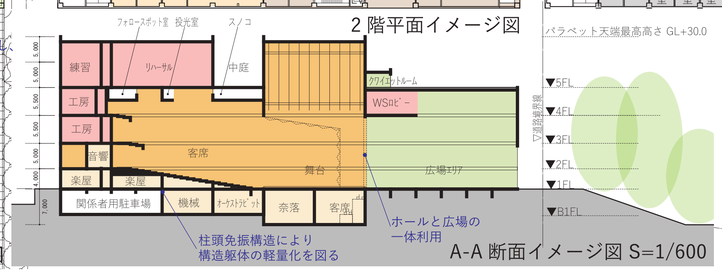
4 階平面イメージ図

エリア凡例

A	運営エリア・他
B	ホールエリア（演者＋管理者）
C	ホールエリア（観客）
D	文化芸術創造支援・活用エリア
D	災害文化創造支援・発信エリア
D	広場エリア
D	ロビー



5 階平面イメージ図



A-A 断面イメージ図 S=1/600